粘土製作における「触れる」ことについての一考察

平井　久世

〈問題・目的〉

1. 「触れる」こと

人であっても，ものであっても，最初に触れるとき，それは出会いの体験である。同じ人やものでありながら，身体に伝わる体温や感触が異なる。それは再会と同時に，また異なるものとの出会いである。

触れることは，コミュニケーションのひとつの手段である。ディディエ・アンジュー(1985)は，皮膚の機能として，「充足感を内部に収めておくための袋としてのもの」，「外部と内部の境界を設定し，外部を外側に保っておくための境界面としてのもの」，「他人とのコミュニケーションや意味ある関係を樹立するための基本的な手段であり場所」を挙げている。また，皮膚は，「他者によって残された痕跡を刻み込んでおく表面」であるとする。さらに「共通皮膚」についても述べており，赤ん坊と母親は「共通皮膚」という両者の界面を作り出しており，この「共通皮膚」によって，赤ん坊と母親は直接的コミュニケーションや「密接な一体化」を成している。共通皮膚は，「両者の感覚，情緒，心的イメージ，生命のリズムに共鳴して震える一枚の垂れ幕」であり，全く媒介というものをもたない皮膚と皮膚の接触を「原初」のコミュニケーションとし，「身体間の原初的な接触体験」は，現実の諸秩序が交じり合ったままの混沌とした状態としている。そのような直接の接触を禁止されることを通して，混沌とした状態は区別され，明確化し，「自分の体が他人の体とは別物であること」を学ぶという。また，「触覚は五感のうちでただ一つ，みずからを省みる内省的な構造を持っている」とし，「触っていると触られているとの両感覚を同時に体験している」という。つまり，皮膚の内側，身体には，充足感など，いろいろな体験，感情が収められていき，皮膚は身体に収められたものが外側に簡単に流れ出していかないように守っている。また，外側の世界からの侵入を防ぐ働きの両方を持っている。そして，皮膚を境界として，人やものに「触れる」ことによって，相手の存在を知り，他者の存在を確かめるようになる。他者に触れることは，同時に自分が触れられることであり，触れられることによって，自らの存在を知り，確かめていく。他者に触れること，あるいは他者に触れられることによって，私たちはさまざまな感情を持ち，自らの思いを伝え，他者と関係を結んでいく。手で他者に「触れる」ことは，直接的な身体接触，コミュニケーションが行われているだけではなく，同時に〈わたし〉自身に「触れる」という体験をしていると言えるのではないだろうか。

心理療法においても「触れる」という感覚の重要性が示唆されている。直接的な触覚体験を得られるものとして，箱庭療法において，「砂に触れる」という行為に関する多くの研究がみられる。

箱庭療法において砂に触れることにより，望ましい退行が生じやすいとされる。砂という自然に存在するものに触れることは，人間のもつ動物的，本能的な感覚に働きかけることになり，退行が促されるだけでなく，「心の深層の表現が生じやすい」と言われる(河合，1986)。特有の触覚体験を持つ療法として，他に芸術療法における造形が挙げられる。造形には，彫刻，陶芸，粘土などいろいろなものがあるが，導入が簡単で，普及しているものとして，粘土が挙げられる。粘土には独特の感触があり，その感覚が，他者に触れたときに起こる感覚に似ているところがあるように思われる。重量感，自分が触れたときに手に返ってくる重さ，得体の知れないものに触れる驚き。粘土の重量感や弾力に手で触れ，働きかけることから，粘土は形を変え，ときには作り手のコントロールを離れて思い通りにならないこともある。その中で自分の何かを伝え，表現し，作品が作られていく。どのように粘土を扱うか，これは，作り手と粘土のやり取りとして捉えることができるだろう。しかし，粘土はものであり，人とやり取りするようには応えてくれない。そのため，人が人に直接触れるというやり取りと同じものとして捉えることはできないが，そこには，作り手の，他者や外の世界との関係のとり方，あり方が表現されているのではないだろうか。今回は，粘土を媒介とし，粘土に「触れる」ということから，「触れる」体験に迫ってみたい。

2. 粘土造形について

粘土造形は芸術療法の中に位置づけられる。芸術療法は，「心の内奥にあるものを，何らかの形で表現したいという，人間が生来的にもつ欲望を基盤とした心理療法」とされる(伊藤，1992)。心理療法において，粘土は表現手段として用いられるだけでなく，遊びの手段としてもたびたび用いられる。河合(1992)は，芸術活動や表現活動が，療法として意味を持つのは，クライエントがすでに知っていることを表現する中で，「自分でも今まで気づかなかったことが出てくる，あるいは新しい可能性が生まれてくる」という「創造的な活動」が入るときであるとしている。

中井(1985)は，統合失調症者における粘土造形について述べている。粘土は「大地」的な要素を持っており，「攻撃性を制作に転導する変換器の役割」をし，その重み，扱いにくさ，簡単に変形できるが，細かい作業は困難であることから，「自由連想をおのずと制限し，その危険な飛翔をたえず大地に引き戻している」とされる。野村(1976)は，粘土の拒否・回避，受容について述べており，粘土に最初に触れるとき，「粘性への恐怖」「粘土性の回避」「空間への拒否」が見られるという。「不安定で手にこびりついてくる粘土」は，気味が悪い，未知の，不安を増加させるものであり，粘土に触れること自体が一つの恐怖となる。また，「量感あふれる厚み」を持つ粘土に手をゆだねることへの不安から，世界を固定化しようとする努力として，平面型の作品が見られる。一方，そのような不安が「“接地”(earth)」されたとき，作品はまとまりや立体感を持ったものになっていく。やわらかい粘土は，作者の攻撃性やいらだちを包み込み，感覚自体を楽しめるようになってくる。

粘土は，素材そのものは同じものであるが，変形することは可能であるという可塑性を持った素材である。粘土そのもの，あるいはその作品は，立体的，「三次元的」なものであり，「実際の対象を表現するには，それだけ便利」なものである(ウォルトマン，1964)。粘土は，砂と比べ，水分を含んでいるため，形がそのまま残る。手に持っても，落ちていくことはなく，砂に触れる感触とは異なる体験が見られると考えられる。粘土製作においては，何でも作ることができると

いう点で自由度が高い。一方で，何でも作ることができるということは，1 つの作品としてまとめるためには，作り手自身が能動的，主体的に手を動かし，創造性を働かせなければならず，製作への積極的な関与が必要となってくる。

今回，粘土製作を通して，作り手と粘土の関係に注目し，「触れる」ことがどのように体験されているのかを検討する。「触れる」という体験は，プリミティブな体験であり，言語化が非常に困難であると考えられ，体験を客観的に振り返り，さらにそれを適当に言語化できると思われる年齢等を考慮して，対象を大学生とした。

〈方法〉

調査協力者：大学生 16 名(女性 11 名・男性 5 名，20 歳から 23 歳，平均 20.8 歳)

材料：油粘土 300g，粘土板と質問紙を用意した。粘土は毎回，長方体のかたまりに整形され，しわなどのついていない状態で調査協力者に渡された。また，インタビュー内容を記録しておくために，IC レコーダーを，作品を記録しておくために，デジタルカメラを使用した。

手続き：以下の手順で個別調査を行った。

① 部屋に入室後，調査に関する説明，教示を行った。教示は以下の通りであった。「粘土で何かを作ってもらいたいと思います。今からこの粘土を手になじむまでよくこねて，何か作ってください。終わったらおっしゃってください。もし，途中でやめたいと思ったら，いつでもやめられますのでおっしゃってください。それでは始めてください。」

② 教示後，調査協力者の前に粘土を出し，製作してもらった。時間の制限はなく，調査者である筆者は，製作中立ち会うこととし，製作中，調査協力者からの質問，問いかけなどに関しては，適宜応えることとした。

③ 製作後，ウェットティッシュで手を拭いてもらい，以下の質問紙の項目について，自由記述形式で記入してもらった。

質問紙：1. できあがった作品について，どんな風に作ったか，説明してください。

2. 一番印象に残ったことは何ですか。

3. 作品を作っているときのことについて

a. 粘土に触れる前，どんな感じがしましたか。

b. 粘土に最初に触れたとき，どんな感じがしましたか。

c. 触れているとき，どんな感じがしましたか。

d. 何かを作ろうと思ったとき，どんな感じでしたか。どんな風に思いましたか。

e. できあがってどう思いましたか。粘土から手をはなしてどんな感じがしましたか。

f. 人がいることについてどう感じましたか。

④ 質問紙に記入後，質問紙の各項目にしたがって，インタビューを行い，最後に調査全体の感想を自由に話してもらった。感想後に，調査協力者の前で，筆者がデジタルカメラによる撮影を行った。

〈結果および考察〉

質問項目３-ａからｅの順にしたがって，全調査協力者の質問紙への回答内容，インタビュー内容について，体験過程の検討を行い，それぞれの段階における主な体験を抽出した。その結果，粘土に触れる前，触れているときにおいて，特徴的な違いがみられ，協力者を２グループに分けることができた。１つ目のグループは，‘作品を作ること’が強く意識され，作品が１つにまとめられた８名である。もう１つのグループは，時間をかけて粘土に触れ，１つの作品からの「世界」「風景」の広がりがみられた８名である。以下，前者のグループを「製作収束」グループ，後者のグループを「製作展開」グループとする。

製作収束グループは，作品が１つにまとめられ，製作時間の平均は，11分19秒であった。製作展開グループは，作品を１つ，ないしは２つ以上作り，それぞれの作品が単独で存在するのではなく，一つのまとまりをもった「世界」「風景」として表現されていた。製作時間の平均は，19分23秒であった。

２つのグループの質問紙への回答，およびインタビュー内容において，特徴的な違いが見られたのは，粘土に触れる前，および触れているときにおいてであった。すなわち，両グループでは，粘土へのかかわり方において違いがあると考えられる。

【製作収束グループ】*1

触れる前および，触れているときに，作品について何を作ろうか考えようとする態度の高さが見られた。「何かできるかな(ａ)」「何でもと言われ…必死に悩んでいた(ｎ)」と，作品を作ることに対しての不安や困惑，焦りへの言及が多かった。また，触れているときに，「いつまでたってもやわらかくならないので，あきらめた(ｂ)」，「扱いにくい感じ，手に負えない(ｌ)」，「思い通りにならなくて少々いらついていた(ｎ)」など，手になじむ感じがなかなか得られないことへのいらだち，焦り，“思い通りにならない”*2ことについて述べた協力者が多かった。作品として表現されたものは，‘プール’，‘ブドウ’といった，紐や球をいくつか作り，それを並べ，重ねていくという，１つの作業の「繰り返し(ｃ)」で作られた作品，そのとき作り手が「思い出したので(ｏ)」作った，あるいは「一番気になっているもの(ｂ)」として‘牛’のような動物や，‘車’，‘新聞’などが作られた。

【製作展開グループ】

触れる前に，作品についての言及はほとんど見られない。製作収束グループ同様，“思い通りにならない”ことについても述べられるが，時間をかけて粘土をこねている。時間をかけることで，感触を楽しむことができ，こねることに楽しみやおもしろさを感じて，触れるときに“思うようになる”ことについても述べられる。においややわらかさ，温度といった，粘土の持つ特性が「自分の中に広がっていく(ｆ)」ように感じられたり，最初に触れたときの粘土の冷たさが，こねることによって，自分の体温に近づき，同じくらいになり，あたたかさを持った粘土は「命を持つ(ｉ)」ように感じられることもある。作品は，「命」につながるような，動物や植物が複数登場する「世界」，あるいは‘山並み’といった，大地そのものが表現された「風景(ｊ)」として表現され，１つの作品から，それに関係する作品が作られ，全体として「世界」のまとまりを感じさせるものとなった。

事例

ここで，製作収束グループ，製作展開グループからそれぞれ事例を挙げ，「触れているとき」に注目し，両者の粘土へのかかわり方について，個々の事例から詳しく検討する。

【製作収束グループ】A さん(男性)　製作時間 20 分 5 秒　《車》

【製作中の様子】粘土を手にして，少し笑いが混じったような表情。粘土が堅いのか，顔をしかめ，両手で力いっぱい粘土板に押しつけながらこねる。ふと顔を横に向け，ぐるりと部屋を見渡す。粘土を 2 つに分け，1 つのかたまりを車の車体の形にし，一旦粘土板の上に置く。残りのかたまりを 2 つに分け，両手でひとつずつ持ってこね，そのかたまりをさらに分けて，小さいかたまりを両手に持ってこね続ける。粘土をひねり出しては整えることを繰り返し，形をそのまま作るのではなく，少し遊びながら，タイヤを作り出し，時折笑顔が見えるようになる。前輪の片方をつけようとするが，車体の幅が狭く，取りつけるのに少し困ったように笑う。指先に力が入り，タイヤと車体の底がぐにゅっと崩れる。はっとしたように苦笑い。もう片方の後輪をつけるときも，間が狭く，少し困ったように笑うが，指をぎゅっぎゅっとタイヤとタイヤの間に入れて，くっつけていく。時間をかけて車体の形を整え，少し笑いながら車を眺める。「できました」。

【インタビュー】(‘ ’内は質問紙への回答，「 」はインタビューでの言葉を抜粋。)

(触れる前)‘粘土を目の前にしたときは結構スムーズに作業ができるだろうと予測していた’。「自分の意思通り‥思い通りに作れるもんなんかなあと思ってましたけど」「堅かったですね。もっとやわらかいもんだと勝手に思ってました。」(最初に触れたとき)‘堅い。冷たい。久しぶり。’(触れているとき)‘なつかしい。面白い。汚れが気になる’。「懐かしい感じが。なんか，久しぶり。ちょっとわくわくってわけじゃないですけど，子どもに戻ってというか。ちょっと引き込まれていくような感じっていうか」。(何かを作ろうと思ったとき)‘形にできそうなものがすぐには思いつかず，少し困ったが，いざテーマが決まると，それに向かって突っ走っていく感じがした’。「タイヤとかも結構，ここら辺崩しちゃったんですけど。でも，そのころは結構開き直ってたんで」「なんか自由が利かないなあって実感したあとに，タイヤのつけ方とかで。結構ここが狭かったんですよ。そこしまったなとか思ったんですけど，強引に指入れたら崩れていって。あ，でもこれ，崩れていいんじゃんと思って。それからは崩しまくって。あいだを作ってとかってしてると，こういう作り方もいいんだなとか思って。大胆にいってました(笑)」。

(できあがって)‘アンバランス。でもどこか喜しい気持ちも。’「ちょっとタイヤが高いのとか，ちょっと不恰好な感じ。それこそ幼稚な感じがしますけど。でもできあがってみてやっぱり，あ，作ったんやってか，自分が作ったんやって。愛着っていうんですかね，なんか。こう嬉しさ。」〈手をはなしてみて？〉「人に見せられるっていうか。こう，どうだっていう」「手放すっていうか。

ちょっと見てみろっていう。なんか，送り出す感じ…見せて回りたいっていうか(笑)」「やっぱり子どもに近いような気がしますけどね。自分の母親がこんなこと…なんかそんな気持ちですね」

Aさんは，目の前に粘土が出てきたときには，「作業はスムーズにいくだろう」と予測し，昔の粘土遊びを思い出して，「子どもに戻って」粘土に触れる。しかし，粘土は自分が思っていたよりも堅く，なかなかやわらかくなっていかず，思いもよらないところに亀裂が入ったりし，“思い通りにならない”という思いが強くなっていく。少しして「あきらめる」が，部屋をぐるりと見回したのは，思い通りにならないことで，やわらかくすることにあきらめを感じたときだったのではないだろうか。Aさんはこねることを少し休み，作品の「テーマ」を決めて，粘土とかかわることにし，まだやわらかくなっていないが，車体を作り出す。手になじませることよりも，「作品を作る」ことを強く意識していたと考えられる。Aさんは一旦車体を置き，残りのかたまりを小さく分け，手の中におさまる大きさにしていく。手の中におさまる大きさの粘土をこねながら，何か形を作るでもなく遊ぶことを楽しむことにより，表情にも笑顔が見られる。思い通りにならない堅さがやわらかくなっていき，同時にAさんの思い通りにならない，いらだちや緊張感のような‘かたさ’もやわらかくなり，粘土におさめられていったのではないだろうか。

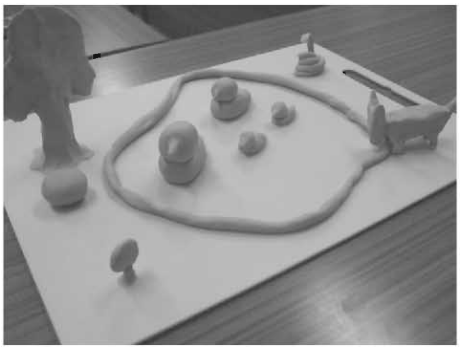
一方で，「早く作らないとと思っていた」と述べられるように，作品を作ることが常に意識され，作品作りに戻るが，タイヤをつけるときに思いもよらないことが起こる。うまくつけられず，強引に指を入れると，タイヤと車体が崩れてしまい，はっとした顔をする。それは，粘土の「自由が利かない」，「早く作らないといけない」，作品を自分の思い描いたように作りたい，というAさんの焦りや作品に対する思いが崩れるような体験ではなかっただろうか。一方で，「でもこれ，崩れていい」と気づく。「開き直った」と述べるように，これはAさんと粘土のかかわりが開けた，広がった瞬間であったと考えられる。「こういう作り方もいい」，「結構融通利く」というように粘土への思い，かかわり方が変わる。そこから，「大胆に」崩しながら，作品を作り上げていく。それは，今までの思い通りにならなかったいらだちをぶつけているようにも感じられる。また，今までの作品として上手く作ろうとするかかわりから，かかわり方が広がり，安心して，作品への思いをぶつけることができるようになったのではないかと考えられる。

スムーズにいくと思った作業がなかなかうまくいかないことは，Aさんにとって，粘土によせる期待が裏切られるようなものではなかっただろうか。しかし，作品が崩れるということを通して，これでもいいということに気づいた。それを通して，粘土が崩れてもいいと，粘土に対する気づきが生まれただけではなく，自分が崩してもいいということに気づき，開かれていったと考えられる。

【製作展開グループ】Bさん(女性)　製作時間35分25秒　《池のほとり》

【製作中の様子】粘土を手渡すと，両手で持ってしっかりと粘土板の上でこねる。においを少しかぎながら，手の中，粘土板の上で5分ほど，四角い形が残らなくなるまでしっかりこねる。一旦粘土を丸め，そこから少しちぎってつまみ出す。小さなアヒルを1羽作り，全体を眺めて，しっかりと安定させる。少し大きめのアヒルをもう1羽作り，2羽を並べるように置く。かたまりの粘土を少し見て，少し取り出し，手の中でこねながら，粘土板の上に置き直し，紐を作ってい

く。紐で輪っかを作り，池。その中を先ほど作った２羽のアヒルが泳ぐ。しばらく何を作るでもなく粘土をこね，空中で紐のように伸ばし，丸めてヘビを作る。木，たまご，池の水を飲む犬を次々に作り，池のほとりに置く。このあたりから，紐や小さな木を作ったり，丸めたりするが，なかなか形が定まらない。小さなアヒル２羽を作り，最初の２羽の近くに並ばせ，粘土を使い切り，一旦池の中を眺める。小さな木を作り直して完成。「終わりました」。



【インタビュー】

(触れる前) ‘久しぶりに見たため，少しおどろき，不思議な感じがした。’「何か作るんだろうっていうのはわかるけど，粘土で何かを今作るっていうのがなんか不思議な感じがして。ちょっと非日常な感じがして。」「幼稚園のときによくやってたのを思い出して。このにおいとかが，やっぱり同じようなにおいで。色とかも。それをすごい思い出しましたね。」「いろいろ考えないと作れないっていうのがあって。たぶん昔とかやったら，粘土があって，どんどんいろんな変な形とかよく分からない生き物とかもたぶんどんどんどんどん作って。で，また崩して，ぐちゃってしては作ってってしてたんだろうなって思ったんですけど。今だったら，何作ろうって考えて，やっぱり何か作るんやったらある程度ちゃんと作らないとっていうのがあって。(中略)…一つのもの，というか。ものとして分かるようなものとして作らなきゃいけないなっていうような。そういう意識は。それは変わったなって思いました。昔と比べて。」「懐かしい感じとかは一緒やと思うんですけど。ものを作るっていうことについてやったら，たぶん違う気がします。」

(最初に触れたとき) ‘ひんやりして気持ちがよかった。臭いや手ざわり，色がなつかしく感じた。’

(触れているとき) ‘感触，臭いがどんどん自分の中に広がってきて，幼稚園のころを思い出した。丸めたりのばすのも楽しいが，こねまわすだけでも不思議とおちつく感じがしてきた。’「初めに触れたときは，こうヒヤッとする，ものがあたってる，あるって感じだったんですけど。なじませて，いろいろ動物とか木とか作ってると，どんどんにおいとかもふわーって広がってきたりして。粘土がなじんでくるような感じで。粘土で何か作るっていうのが，自分の手から何かが作られてるっていうイメージですね。出てるっていうか。ただ粘土のかたまりからぽんってできたじゃなくて，自分の手でいろいろ触ってて，そこから生まれるって感じでした。」「いろいろ何作ろうか考えてるときとかは，コロコロしたり，むにゅむにゅしたりなんですけど。それもそれで，手になじんでくる感じがあって。」

(できあがって) ‘ひとかたまりの粘土をすべて使いきって，全く別の作品として生まれ変わったことで，何か満足感のようなものを得られた。決して上手くはないが，このままそっと取っておきたいと思った。粘土から手をはなすと，落ちつくが少しさみしい感じもあった。’「最初は何作ろうとか全然ない，何もテーマとかも何にもないとこで，ただ一塊の粘土だけ，ぽんてある状態やったら，何も見えてなかったんですけど。最終的に，粘土も全部一応別のものに変わって。1

つの小ちゃい世界みたいな感じに落ち着いて。ていう満足感。」「何かを作ってくださいじゃなくて，ぽんて渡されて，何でも自由にって言われると，すごい困って。最初はどうしようっていう，迷うのと。何にでもできるからっていう。何をしようかなっていう好奇心みたいなのも。両方ありましたね。」〈‘落ち着く’？〉「そうですね。落ち着くというか，できあがってホッとする感じ。」〈‘さみしい感じ’？〉「ずっと粘土を触ってたのがなくなって。なんていうのかな…。手持ち無沙汰っていうか。そういう感じ…」

Bさんは最初，粘土を「久しぶりに見て」驚く。大学生となった今，粘土のような感触のものに触れること，何もないところから何かを作り出すということのない日常から，「不思議」な，「非日常」な場で粘土と再会した。何かできるのかという不安と同時に，何にでもできるという好奇心を持って，粘土とかかわり始める。粘土はどんなものだっただろうかと昔を思い返しながら，時間をかけてこねる。粘土の形が分からなくなるまで，しっかりとこねることで，Bさんの手の温度が伝わり，粘土もあたたかくなり，「ヒヤっとするもの」，単なるものから，生きたもののように感じられたと考えられる。粘土の感触やにおいが「広がって」きて，粘土がどんどん自分に近づき，一体になった自分から出てくるように，自然と生まれたのが，最初のアヒルである。まさに命をもった生き物が生まれる。それをしっかりと安定させることは，不安定さを持つ粘土を安定させ，地に着けるだけではなく，Bさんの作品，これから始まる「世界」が地に着き，始まった瞬間ではなかっただろうか。アヒルが1羽生まれたことから，つがいとしてのアヒル，アヒルの泳ぐ池が現れる。池ができてから，再び何を作るでもなくこねる。「こねまわすだけでも不思議とおちつく感じがしてきた」と述べるように，粘土をこねてその感触を楽しむだけではなく，粘土となじんでいく安心感，粘土に包まれるような落ち着きを感じていたのではないかと考えられる。「何が生まれるか分からないたまご」は，丸めることを楽しんでいる中でできあがったもので，「結構最初のほうの段階で作ろうと思ったもの」と言う。それは，Bさんにとって，粘土に対する最初の思いが映されたもののように思われる。最初は「どうしよう」と迷う不安と，「何にでもできる」，何かを作ろうという好奇心，何かが生まれる期待，というBさんの粘土への最初の思いが込められたものが，「何が生まれるか分からない」が「面白い」という期待ももったたまごという形になったのではないだろうか。たまごや2羽のアヒルをうらやましがるヘビ，水を飲みに来た犬，池の周りの木と，物語が生まれるかのように，それぞれの作品がつながりながら，Bさんの「世界」が作られ，広がっていくが，十分に触れることを通して，“思い通りにならない”ことがおさめられつつ，作ろうと思う作品のイメージがはっきりしていくようである。“思い通りにならない”感じがおさめられること，粘土から得られる安心感が，作品作りにより深く没頭でき，複数の作品が生まれることにつながったと考えられる。

両者における「触れる」体験

2事例をもとに，製作収束グループ，製作展開グループにおける，「触れている」ときの体験の違いについて検討を加える。

触れる前，および，触れているとき，製作収束グループの作り手は，作品を作るということに

とらわれる傾向がうかがえた。作品という形にしなければならないのに，なかなか形の定まらない粘土は，作り手の不安やいらだち，焦りを大きく感じさせ，強めていくものとなり，手にはなじまず，“思い通りにならない”感じが続いたのではないかと考えられる。それは苦しさ，つらさを伴うものでもあっただろう。作品にとらわれ，手になじまない粘土は，手になじませることへの抵抗やあきらめさえも引き起こしてしまう。粘土を小さく分け，紐や球を繰り返し作り，それを作品としてまとめていくことは，野村(1976)の言う，粘土に触れることへの恐怖から「世界を固定化しようとする」ように，形の定まらないものに触れる不安を，こねる，丸めるという繰り返しの中でおさめ，作品，さらに自分の不安を粘土板という地に着かせ，安定させようとする努力として表現されていたのではないかと考えられる。「今，気になっているもの」，また「思い出して」，テーマを決めてから作られた作品は，作り手の現実の生活により近いもの，あるいは意識的な側面が表現されている可能性がある。早く作品を仕上げ，粘土から手を離すことで，自分の不安や焦り，思い通りにならない不安，粘土が自分のコントロールを離れていくことへの不安をおさめようとしたと考えられる。

一方，製作展開グループにおいては，作品を作ることに強くこだわらず，こねることに楽しさやおもしろさを感じている。十分にこね，においややわらかさが自分の中に広がっていくことを通して，自分と粘土の距離が近づき，一体となっていくように感じられる体験であっただろう。時間を十分にかけてこねることで，作り手から粘土に伝わった温度，あたたかさは，「命」のように感じられ，「命」を持った，「生」を受けた作品が生まれ，自分が作ろうと思うもののイメージがはっきりとしていったのではないだろうか。最初の作品に関係する作品が生まれ，それぞれの作品が関係を持ちながら「風景」や物語が生まれ，ひとつの世界としてまとめられていく。作品の細かい部分など，すべてが思い通りになるわけではないが，粘土が手になじみ，思い通りにならない不安はおさめられ，安心して作品を作り出すことに没頭できたと考えられる。

製作展開グループでは，十分に粘土に触れているときに粘土へのかかわり方に気づくと考えられる。“思い通りにならない”感じを楽しむ，時間をかけて，粘土とどのようにかかわればよいのかという空間にとどまることによって，作品作りにより深く没頭でき，複数の作品が生まれ，それらが広がりを持つようになった。一方，A さんは作品を作る中で，「こういう作り方もいい」という気づきが起こったが，製作収束グループにおいては，作品を作るということを通して，粘土へのかかわり方に気づくのではないだろうか。粘土に「触れている」体験の違いが，作品を表現するあり方，また作品の作る世界の広がりに影響すると考えられる。

次に，両者のグループに共通してみられた体験について検討する。両者ともに，段階は異なるものの，粘土へのかかわり方，作品の作り方が昔の自分のそれとは異なるということに気づく。また，「崩していい」「こういう作り方もいい」という新たな気づきも生まれる。製作過程は，現在の自分のかかわり方，今までのかかわり方の変化に気づき，新たなかかわり方を模索する体験であったと言える。製作が終わって，手を離すと，「自分は粘土を触っていたんだ」ということに改めて気づくが，それは粘土が自分の手から初めて切り離されるときでもある。距離が近づき，自分の手の中で動いていた，自分のものであった粘土は，「作品」という形に変わって目の前に現れる。目の前の作品は，自分の手から生まれた，作りだされたものであり，自分の子どものような，自分の一部のように感じられ，作品には「愛着」が生まれている。タスティン，F.(1972)は，乳児

の皮膚体験において，「自分が皮膚を持っていることを子どもが実感するためには，体の中身の流れが終末に行き当たることがありうるという事実を受け入れなければならない」と述べている。作品が手から離れるということは，自分の一部が切り離され，分けられるような，そして自分の身体の存在に改めて気づかされるような体験ではなかっただろうか。そこから，作品に対する「さみしさ」が感じられる一方で，切り離されることにより，作品を自分の外側のものとして，改めて見直すことが可能となったと考えられる。

全体の体験過程から―混沌を分けていくこと

最初，四角い形として出された粘土は，作り手がこねることによって変形し，何の形にも定まらない。それは，ものであるから，そのものが変わることなく存在するという安心感，安定感がある一方で，その形が何も変わらないかも知れない，変わるのだろうか，という不安定感も伴う，時に自分が大きく揺らがされる体験だろう。それは，得体の知れない，不安を引き起こす，混沌としたようなものと感じられたのではないだろうか。粘土に触れ，向き合う作り手自身も，何にでもできるという好奇心や期待とともに，思い通りにならない，何か形になるだろうかという困惑や不安を感じ，この両方が入り混じる，混沌とした状態に引き込まれていった。これは，他者とのやり取りの中で起こってくる混沌とした状態と言えるだろう。手の中におさまるように，ちぎること，分けることで，全くの混沌への不安は少しずつ分けられていく。触れることで，相手の感触を感じ，確かめることは，得体の知れないものへの不安を「接地」させ，おさめていく作業であったと考えられる。それは，ディディエ・アンジューの言う，作り手との粘土の間の「コミュニケーションや意味ある関係を樹立するための基本的な」体験であり，「原初」のコミュニケーションにつながるような体験だったと言えるのではないだろうか。赤ん坊と母親においては，そのような直接の接触を禁止されることを通して，混沌とした状態は区別されていくとされるが，今回は，粘土をちぎる，分ける，「作品を作る」ということを通して，形の定まらない粘土が分けられていく過程と，作り手の中の困惑や漠然とした不安，混沌としたものが，分けられていく過程とが同時並行的に起こっていたと考えられる。混沌としたものを分け，1 つのまとまりを持つものとしてまとめていくことは，作り手の今もっている表現する力によると同時に，作り手が表現する力を引き出し，より深めていくものとなったと思われる。そこでは，作り手と，粘土という他者との距離のとり方，作り手のあり方が表現され，新たな気づきも生まれ得る。作品は作り手のあり方を表現するものであり，作品を通して気づきを振り返ることができる。崩されても存在がそこにあり，製作過程の跡を残し，作り手にそれを映し返す粘土は，まさに鏡のような存在であったと言える。

〈わたし〉との出会い

作り手は，手で触れることで，粘土とやり取りを始める。触覚という身体感覚を通して，感じられる粘土の抵抗，反発は，作り手に自分自身の身体の存在を感じさせる。製作過程において，作り手は，粘土に触れ，懐かしさとともに，かつての粘土遊びや過去の自分を振り返り，再会する。また昔を振り返るとともに，今の自分の粘土へのかかわり方やその変化に気づく。過去の〈わたし〉に出会い，過去の〈わたし〉と今の〈わたし〉の感じている感触が同じであると気づくこ

とは，過去の〈わたし〉も現在の〈わたし〉も同じものであり，かつ，それがつながっているという自己の連続性を，身体で感じる体験であったと考えられる。一方で，現在の〈わたし〉は，過去の〈わたし〉と全く同じ存在ではない。どのように粘土とかかわるか，「作品」として何を作るか，「作品を作ること」への感じ方は，昔のそれとは異なってくる。粘土の形を崩し，作る過程は，自分の粘土へのかかわり方を崩しながら，新しいかかわり方を探りながら作っていく，作品という自分の世界，〈わたし〉を主体的に創造，表現していく過程であったと言えるだろう。

今回みてきた「触れる」という体験は，人が人に直接「触れる」というやり取りとは異なる体験であるが，粘土製作を通して，人がものという他者に「触れる」体験過程について考察した。今回は，1 回の調査ということもあり，作品という形にまとめることで，調査を終わらせ，おさめることとした。しかし，実際の心理療法において，粘土を導入したときに，必ずしも作品という形にまとめられるとは限らない。また，その過程において，1 度だけ粘土製作が行われることもあれば，数回にわたって製作が行われることもある。その流れの中で，作り手の粘土へのかかわり方だけでなく，作品で表現しようとした世界やその変化，そこに立ち会うセラピストとの関係をとらえることにより，作り手の「触れる」体験のあり方を深く考えることができると思われる。今回，作品によって表現される，作り手の世界や，作り手とそこに立ち会う筆者との関係について十分に触れられなかったが，改めて検討したいと思う。

付記　本論は，平成 19 年度京都大学大学院教育学研究科修士論文の一部を加筆・修正したものです。ご指導いただいた，角野善宏先生，伊藤良子先生，そしてご協力いただいた調査協力者の皆様に，心より感謝申し上げます。

〈引用文献〉

Anzieu, Didier(1985) Le moi-peau：邦訳『皮膚 - 自我』(1993) 福田素子訳　言叢社
伊藤俊樹　芸術療法：氏原寛他編(1992)　心理臨床大事典　391 - 396　培風館
河合隼雄(1986)　心理療法論考　新曜社
河合隼雄(1992) 心理療法序説　岩波書店
中井久夫(1985) 中井久夫著作集　精神医学の経験　第 2 巻　治療　岩崎学術出版会
野村るり子(1976) 分裂病者等の治療場面における粘土造形について　芸術療法 7，73 - 79
Tustin, F.(1972) AUTISM AND CHILDHOOD PSYCHOSIS：邦訳齋藤久美子監修・平井正三監訳・辻井正次他訳(2005)『自閉症と小児精神病』創元社
Woltmann, A.G.(1964) 泥と粘土：Haworth, M.R.編：邦訳　外林大作訳(1969) 『児童の心理療法 II』 525 - 545　誠信書房

〈参考文献〉

Bachelard, G.(1948) La Terre et les Reveries de la Volonte, Librairie Jose Corti：邦訳『大地と意志の夢想』(1972) 及川馥訳　思潮社

樋口和彦・岡田康伸編(2000) ファンタジーグループ入門　創元社
伊藤良子(1988) 箱庭表現の「深さ」について　眠れる少年　箱庭療法学研究　第 1 巻　第 1 号 3-16
木下康仁(2003)　グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践　弘文堂
片畑真由美(2003)　身体感覚がイメージ体験に及ぼす影響　箱庭制作における触覚の観点から 心理臨床学研究　第 21 巻 第 5 号，462-470
河合隼雄編(2000) 講座心理療法第 4 巻　心理療法と身体　岩波書店
河合隼雄編(2001) 講座心理療法第 6 巻　心理療法と人間関係　岩波書店
Laing, R.D.(1961) SELF and OTHERS：邦訳『自己と他者』(1975) 志貴春彦，笠原嘉訳　みすず書房
中井久夫(1976)　“芸術療法”の有益性と要注意点　芸術療法 7，55-61
成田善弘(1998)　心身症者の身体の非自己化について―被腎移植者との比較から　精神分析研究 第 42 号 第 2 巻，137-143　岩崎学術出版会
内藤あかね・中井久夫(1995)　粘土制作による葛藤の解決―早期初老期痴呆患者への芸術療法― 日本芸術療法学会誌 第 26 号 第 1 巻，64-74
佐藤むつこ(1998) 粘土による相互制作を併用した面接過程　強迫神経症の K さんとの事例を通じて　箱庭療法学研究 第 11 巻 第 2 号　49-59
上瀧新子(1994)「閉ざされた身体感覚」を訴える女性との合同粘土製作　日本芸術療法学会誌 第 25 巻 第 1 号　85-91
山中康裕(1999) 心理臨床と表現療法　金剛出版

*1　「　」内は調査協力者の言葉，(　)内のアルファベットは，調査協力者を示すものとする。
*2　“　”内は，全体の体験過程の検討を行い，それぞれの段階における主な体験を抽出した際の，体験内容を示している。

(臨床心理実践学講座　博士後期課程 2 回生)

(受稿2009年9月7日、改稿2009年11月30日、受理2009年12月11日)

Study on the Experience of a Touch through Clay work

HIRAI Hisayo

A touch represents the experience of an encounter. Touch is also a way of communication. We can ascertain both our existence and the existence of another person by a touch. This paper considers the experience of a touch through clay work. The subjects were asked to engage in clay work and then told to answer a questionnaire; following this, they were interviewed about their experiences. The subjects can be classified into two groups; those who worked on a single piece, and those who worked on several pieces that formed one story. The latter group touched clay a lot more and gradually accepted their anxiety about clay work, and then they proceeded to work on several pieces. It seems that the experience of touching clay relates to forming or expanding their stories. I can say that touching clay is akin to being confused and that dividing the clay into small parts or pieces is equivalent to clearing this confusion. Further, by touching clay, they become self-aware and have an encounter with their own self.